

令和6年度 総合型選抜（A0型選抜） 入試採点基準

問題1

（解答例）

我が国の食用魚介類の自給率は1960年代には110%を超えていたが、1970年以降は低下し、2000年代初頭には50%にせまる最低値を示した。2000年代後半から2010年にかけて自給率はわずかに上昇した後、横ばい状態となり、2020年では60%を示している。自給率が低下した期間を1990年以前とそれ以降に分けてみると、1990年までは国内生産量は減少していないが輸入量は増加している。式2によると、輸入量が増加すると国内消費仕向量は増加する。つまり、式1の分母にあたる国内消費仕向量が増加したために、自給率は低下したと考えられる。1990年以降の自給率の低下においては、国内生産量の減少と、輸入量の増加による国内消費仕向量の増加が原因と考えられる。

（327文字）

*採点のポイント：自給率の変化について説明していること。自給率の変化が国内生産量の増減だけでは説明できないことに言及していること。記述が論理的に行われていること。

問題2

（解答例）

図から読み取れる事柄の1つ目は、1人1年当たり生鮮魚介類の購入量が、横ばいであった2002年以前と、減少傾向で推移した2006年以降の2つの期間に分けられることである。2つ目は、2006年からの上位品目の購入量の変化は、減少幅が大きいイカやサンマと、減少幅が小さいか横ばい傾向のサケやブリに大別されることである。3つ目は、上位品目において順位の入替わりが生じたことである。2006年までの購入量1位はイカであったが、2010年以降はサケになった。また、2006年以降ブリが上位5位までに入った。1人1年当たり生鮮魚介類の購入量減少の理由として、魚介類の価格上昇が考えられる。上位品目の購入量の魚種による変化の違いと順位の入替わりの理由は、イカやサンマが不漁により流通量が減ったのに対し、輸入量の多いサケや養殖が盛んなブリは一定の量と価格で流通し続けていたためだと考えられる。

（390字）

*採点のポイント：1人1年当たり生鮮魚介類の購入量の変化、上位品目の魚種ごとの購入量の変化の違い、上位品目の順位の入替わりなど、図から読み取れることに言及していること。読み取った事柄の理由について言及していること。記述が論理的に行われていること。